

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 26 日現在

機関番号：14101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23531249

研究課題名(和文)同僚性の構築による教師の力量形成研究—ライフヒストリー的アプローチを用いて—

研究課題名(英文)A Research on developing competence of teacher by constructing of colleague-using life history approach--

研究代表者

森脇 健夫 (Moriwaki, Takeo)

三重大学・教育学部・教授

研究者番号：20174469

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：日本では、学校の教師が参加し、研修を積む場として校内の研究会がある。筆者は、ある中学校において校内研究がどう組織され、そこにそれぞれの役割を担った管理職、研究主任、教員がどのように関わっているか、また教員がそこでどんな学びをしているか明らかにした。

まず、校長がどのようなビジョンのもとに専門家共同体を作っていくかが重要である。教師たちは自らの来歴の中で授業スタイルを形成しているが、校内研究によって、自らの授業スタイルを自覚し、必要ならば自己変革をする。自己変革の一つの契機が子どもたちの声である。校内研究は教師たちに研鑽と自己変革の場を与えるが、それを実質化するのが、同僚性の構築である。

研究成果の概要(英文)：In Japan, there is an inside research meeting which the teacher of a school participates and stacks training. The writer showed clearly how school-grounds research was organized in a certain junior high school, and the management, lead researcher, and teacher who played each role there are concerned how, or what kind of learning the teacher is doing there. First, it is important whether the principal makes the specialist community on the basis of what kind of vision. Although teachers form the teaching style in their career, by school-grounds research, it is aware of its lesson style, and if necessary, a self-change will be carried out. One opportunity of a self-change is children's voice. Although school-grounds research gives teachers the place of study and a self-change, and construction of coworker nature substances it.

研究分野：教育方法学・授業論

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：教師の力量形成 同僚性の構築 校内研究会 教師の授業スタイル 専門職共同体

1. 研究開始当初の背景

従来の授業研究は、授業が目的とする能力形成や教科内容習得に、手段としてどのような教材や学習活動が有効か、という目的・手段関係を基本枠組みとした視点をとる傾向が強かった。しかし近年、教育方法学においては、授業の「技術主義的な把握」に対する再検討の機運が高まり、教師論としての教師のライフヒストリー研究とミクロな授業研究との間にクロスオーバー的な研究領域、すなわち「授業スタイル」の構築を教師のライフヒストリーの文脈の中で理解しようとする研究領域が成立してきている(森脇 2004)。この流れは、1980年代の「新しい」教育社会学の誕生とともに生まれ、教師論研究としての**教師のライフヒストリー研究**としてその一翼を担ってきた(高井良健一 1995)。その成果に学びながらも筆者の問題意識は、教師個人の授業変革史、とりわけ教師の実践経験と**観の形成、授業スタイルの変革の過程をライフヒストリー的アプローチ**をとることによって明らかにすることにある。そこで得た一つの仮説は、観の形成、授業スタイルの変革の過程は、できごととの出会い、あこがれ、そしてこだわりによって促進されること、そして観と授業スタイルの形成が同時に進行することである。

授業スタイルがはっきりと形成されていない時期とは「観」も明確になっていない時期である。「観」は教師として、実践的な経験の中で「できごと」と出会い、「あこがれ」を持ち、「こだわり」を持つことで形成される。「観」は技術・方法を選び構造化していく。この逆の場合もある。つまりある方法・技術にこだわることで「観」が形成されるという場合である。いずれにせよ、授業スタイルと「観」の形成は同時進行の関係にある。二つ目は、教師が個々の個性的な授業スタイルを持つ一方、共通した基本的な技量も存在する、ということである。例えば学習者の理解の道筋や躓きを予測し、内容を修正したり教え方を工夫したりすることである。

校内研究会は学校における教師文化の伝承の場であり、授業者にとって授業の計画・実施・検討は自らの観や授業スタイルを見直す契機になる「できごと」との出会いのチャンスである。また検討に参加している教師にとっても上と同じことが言える。

その具体的なありようを、同僚との協働での授業づくり、また検討会における議論を個々の教師の受け止め方に即して明らかにすることがライフヒストリー的なアプローチによって可能になる。

2. 研究の目的

1. まずは三重県内のいくつかの小中学校を選び(すでに著者は数校の学校に複数年校内研究会

のアドバイザーとして信頼関係を築いてきている)その学校の教師がどのように基本的な力量を獲得していくのか、ライフヒストリー的アプローチによって、校内研究会を一つの画期とした授業スタイルの形成と変容の歴史を個別事例研究として積み重ねる。さまざまな世代(現在20~60代で計20人前後の)の教師にインタビューを行いモノグラフ化する。

2. 一方で校内研究会の記録も蓄積をしていく。モノグラフ作成の中で、例えば多くのその学校の教師が影響を受けたという校内研究会における発話記録やシステムをその他の校内研究会と比較対照し、その要因を明らかにする。また、アジア各国(中国、タイ)の学校における教員の研修制度、および校内研究会の視察し、教員の力量形成の場としての校内研究会の機能と課題を明らかにすると同時に日本における校内研究会の特質を明らかにする。そこまでが1年目の課題である。
3. 2,3年目の研究期間後半においては、さらにモノグラフや海外視察を積み重ねながら、個別事例研究を超えて、教師が観や授業スタイルを確立する上においてどのような校内研究会を経験することが授業スタイル確立の契機になるのか、そのあり方とデザインについて提言をする。

3. 研究の方法

研究の方法として第一点はライフヒストリー的アプローチにより、授業者の授業スタイルの形成過程を授業者自身の意図や意味づけとの関連でとらえることができ、教師個人の歴史的、文脈的な理解が可能になる。こうした研究結果としての事例は、具体性ゆえに、その事例に出会う他の教師に、事例と自らの授業実践経験を対照させて、自身の経験をふり返る契機を提供できる可能性をもちえる。事例のもつこの性格を、ある個別的な事例に出会った者が自らの経験との類似を見出せるという意味で、典型性と呼ぶならば、個々の事例研究が典型性を持ち得たとき、個々の教師にとっては充分意味をもつモノグラフになる。第二点は、事例研究の個別性を超えて授業スタイルの形成を核とした教師の力量に対してすべての教師が参加する校内研究会がどのような役割を担ってきたのか、その意義、意味を再確認できることである。こうした研究は、校内研究会に参加するとともに教師の授業の参加観察とともにライフヒストリーインタビューを行い、教師の授業スタイルの形成に教師文化がどのような影響を与えたかを明らかにする。

4. 研究成果

1. まず大きな研究の成果としては、ある小規模(各学年2クラスずつ、教員十数名)の公立中学校において、校内研究会に参加し、授業を参観・記録すると同時に授業検討会に参加し記録をとった。また同時にアドバ

イスを行うという役割も著者は果たした。そしてまた管理職（校長）をはじめ、数名の中学校の教師にインタビューを行うことができた。

この中で明らかになったことの一つは学校が授業を核として改革を行っていく際、きわめて重要なのが、校長のリーダーシップであり、そのリーダーシップの発揮の仕方であることである。教師が学び合いを行っていくための専門職共同体を結果的にはつくることができたのは、校長のビジョンと教師たちへの願いであった。中学校の場合、教科の壁や授業以外の活動への忙殺が授業研究そのものをこれまで低調なものにしてきたが、校長のリーダーシップ如何によっては、授業を核として教師たちの専門職共同体を構築することができることが事例によって明らかになった。

2. 教師たちへのインタビューを通してあきらかになったのは、それぞれの教師が、自らの来歴の中で、授業スタイルを形成していきつつあるのだが、共有された研究テーマをもとに校内研究会が組織された場合には、その授業スタイルはあらためて問い返しをされ、自らの授業スタイルを修正したりあるいはまったくこれまでとは違ったものに変革していく場合もある。また授業スタイルを維持する場合にも、あらためて自分の授業スタイルの意味を問うということになることである。こうしたことは、業績、図書に3に集大成として上梓された。
3. 筆者はこの間、上述の中学校だけでなく、三重県内の小学校の校内研究会にもかわり、さらには、タイの小学校の授業参観、および校内研究会に参加した。その中で、教師の学びの場だけでなく、自らの授業スタイルの問い返しとしての校内研究会の役割を明らかにすることができた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計12件)

1. 坂本勝信・康鳳麗・森脇健夫「中国の日本語学習者の物語描写における視座形成の実態」『常葉大学経営学部紀要』第1巻第1号 2014年2月, pp.77-86 (査読有)
2. 康鳳麗・森脇健夫・坂本勝信「中国における中国人日本語教師のライフヒストリー研究—コーホートによる授業スタイル形成の相違に着目して—」『鈴鹿医療科学大学紀要』No.20, 2013年, pp.39-48 (査読有)
3. 森脇健夫・山田康彦・根津知佳子・中西康雅・赤木和重・守山紗弥加・前原裕樹「対話型事例シナリオによる教員養成型 PBL 教育」『京都大学高等教育研究』19号 2013年, pp.13-24 (査読有)
4. 森脇健夫「学校改革・教師の授業改革・学習習慣の形成、三位一体の改革の必要性」<http://www.mie-c.ed.jp/shochu/plan2/4miedaigakuteigen.pdf>(2014.4.25 確認) pp.1-12 (査読無)
5. 森脇健夫・山田康彦・根津知佳子・中西康雅・赤木和重・守山紗弥加「教員養成型 PBL 教育の研究(その1)」『三重大学教育学部研究紀要』第64巻(教育科学)』, 2013年, pp.325-335 (査読無)
6. 森脇健夫「学校が変われば学力も動く」三重県教育委員会『授業改善支援プラン』, 2013年3月, pp.37-48 (査読無)
7. 森脇健夫「『存在論的つながり』と『認識論的つながり』」『学習研究』第456号, 2012年4月, pp.24-29 (査読無)
8. 坂本勝信・康鳳麗・森脇健夫「日本人児童の文章における視座形成の実態」『浜松大学研究紀要』25(1), 2012年3月, pp.81-89 (査読無)
9. 森脇健夫・康鳳麗・坂本勝信「熟練日本語教師の力量内容とその形成—ライフヒストリー的アプローチによる日中の日本語教師の授業スタイルの形成研究—」『三重大学教育学部研究紀要』第63巻』, 2012年3月, pp.267-273 (査読無)
10. 森脇健夫・康鳳麗・坂本勝信・和田明子「日本語教師の力量形成研究—線画の発達と『観』の形成—」三重大学国際交流センター紀要第6号, 2011年3月, pp.53-63 (査読有)
11. 康鳳麗・森脇健夫・坂本勝信「熟練日本語教師の力量内容とその形成—ライフヒストリー的アプローチによる日中の日本語教師の授業スタイルの形成研究—」『異文化コミュニケーションのための日本語教育』(2011 世界日本語教育研究大会論文集), 中国高等教育出版社, 2011年, pp.767-768 (査読有)
12. 森脇健夫(共著)「授業研究方法論の系譜と今後の展望」『授業づくりと学びの構造』, 学文社, 2011年, pp.37-87 (査読無)

〔学会発表〕(計6件)

1. 康鳳麗・森脇健夫・坂本勝信「中国における中国人日本語教師のライフヒストリー—コーホートによる実践的力量的形成の相違に着目して—」, 第43回中部教育学会, 2013年6月29日, 富山大学
2. 森脇健夫「中堅教師の飛躍台としての校内研究(学校)」, 日本教育方法学会第48回大会ラウンドテーブル報告, 2012年10月7日, 福井大学
3. 坂本勝信・康鳳麗・森脇健夫「中国人日本語学習者の物語描写における視座形成の実態—中国で学ぶ学習者を対象とした縦断的・横断的調査を通して—」, 日本語教育学会研究集会第1回口頭発表, 2012年6月2日, 金城学院大学

4. 康鳳麗・森脇健夫・坂本勝信「ライフヒストリーアプローチによる日本語教師の力量形成研究の意義と課題—個別事例研究から熟練教師の熟練性の研究へ—」,日本語教育学会研究集会第1回口頭発表,2012年6月2日,金城学院大学
5. 康鳳麗・森脇健夫・坂本勝信「熟練日本語教師の力量内容とその形成 - ライフヒストリー的アプローチによる日中の日本語教師の授業スタイルの形成研究 - 」,2011世界日本語教育研究大会,2011年8月20日,中国天津市
6. 康鳳麗・森脇健夫・坂本勝信「熟練日本語教師の力量形成と〔二重の応答性〕に関する研究」,中部教育学会第60回大会,2011年6月25日,静岡大学

〔図書〕(計3件)

1. 康鳳麗・坂本勝信・森脇健夫『フレーズで学ぶ はじめての中国語』,三重大学出版会,2014年3月,総ページ数124p(区分不能)
2. 森脇健夫「『学びの協同化』の観点から見る戦後社会科実践史—鈴木正気、安井俊夫、加藤公明実践の関係論的分析—」臼井嘉一編『戦後日本の教育実践—戦後教育史像の再構築をめざして—』,三恵社,2013年9月,総ページ数317p(森脇 pp.226-246)
3. 森脇健夫「第七章 中堅期からの飛躍—『共同的な学び』との出会い」グループ・ディダクティカ編(共著者:山崎雄介・松下佳代・松下良平・杉原真晃・木原誠一郎・久保研二・松崎正治・森脇健夫・藤原顕・萩原伸・村井淳志・吉永紀子・銚山泰弘・石垣雅也)『教師になること、教師であり続けること』,勁草書房,2012年9月,総ページ262p(森脇 pp.137-158)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:
 発明者:
 権利者:
 種類:
 番号:
 出願年月日:
 国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:
 発明者:
 権利者:
 種類:
 番号:
 取得年月日:
 国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

森脇 健夫 (MORIWAKI TAKEO)
 三重大学・教育学部・教授
 研究者番号:20174469

研究者番号:

(2)研究分担者

()

研究者番号:

(3)連携研究者

()

研究者番号: